

RECOVER

1

弓月キリ
月夜のよろず屋

目次

プロローグ

1. 世界の鍵

2. 世界の*****に必要な**

エピソード

あとがき

6

9

14

19

23

この本は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になる環境により、表示の差が認められることがあります。

本書に登場する人物名・団体名・描かれている内容は架空のもので、作中において現代では若干耳慣れない言葉・表記・表現が登場しますが、これらは差別・侮蔑を意図する考えに基づくものではありません。

なお、発行している小説本やグッズは、すべて自分で製本・制作しています。（全てコンビニプリントやセルフプリントで印刷し、自分で平綴じ製本またはフリーソフト等を使って電子書籍データへの変換をしております）

そのため、乱丁・落丁・あまりにもひどい汚れ等がありましたら、お取替えさせていただきますので、弓月キリまでメールかTwitterのDM等にてお知らせください。

読んでいて気になりそうな汚れや不揃いの部分、ズレなどはできるだけように配慮して印刷・製本・制作をしておりますが、本文に影響のない軽微な汚れやズレなどは何卒ご容赦いただけますと幸いです。

プロローグ

——私は普通の旅人だ。

そう言ったら、「規則なので、ギルドカードの提出を」と言われてしまった。ギルドカードって何だ？

だが、怪しい人を街に入れるわけにもいかないのは御尤もではある。仕方あるまい。どうしようか……。

「もう！ 何をしているのよ!？」

街に入ろうとして呼び止められたので衛兵に説明していた私の前に立つ女が叫んだ。

「おお、久しぶりだな」

「あー！ もー!!」

「何をそんなに苛つておるのだ？ 栄養不足か？」

「あんたが、そんなんだからでしょうが!! 何を呑気にしているのよ!？」

「私に人間の機微を求めるのが間違っておるのだ、リサよ」

リサは無言で眉間のシワを伸ばしているようだ。ピンク色のふわふわとしたセミロングの髪と大きく丸くてキラキラしている同じ色の瞳を持つ少女のようなりサは、酒場で話す男達が可愛いという定義に当てはまっているように思える。だから、怒らなければ可愛いと言われると

思うのだが……。

「はあ……もういいわよ。衛兵さん、彼女は私の知り合いです」

「ギルマスの知り合いですか！　しかし、一応、我々も規則でして……」

「そうよね。ねえ、私、ちゃんとギルドカードを発行したはずよ？　何で出さないのよ？」

「む？　そうだったか。どこにあるかな？」

一枚のカードを取り出して、空間にリストを表示させ、検索する。

「おお。あったあった。これのことか？」

見つけたので取り出しを選択すると、私の手のひらにカードが出現する。それを衛兵が機材を使って確認する。

「確かに確認しました。犯罪歴もなし。通って問題ありません」

「お手数をおかけしました」

リサが衛兵に頭を下げる。

「いえ、正直助かりました」

「……本当に手間をかけたわね」

「どうやら、衛兵に同情をしているようだ。何故だ？」

「これが仕事ですから、お気になさらず」

衛兵は苦笑いをしている。

「行くわよ」

「ああ」

やっと街に入ることができた。

1. 世界の鍵

街を歩きながら私から事情を聞いたリサがため息をつく。

「あんたのような、あちこちに飛んでいってしまった世界の鍵を探し求めて時代を関係なく旅している旅人が『普通』でたまるもんですか……それで、今回はどうしたの？」

「鍵が、この街にあるらしい」

「え」

「しかし、世界の鍵の反応が微弱すぎてな。私の探知センサーでは、この時代のこの街の中にあるということしか分からん」

「ええ……まいったわねー……」

世界の鍵は世界を管理するのに必要なシステムの鍵だ。様々な世界の管理者を総合的にまとめている部署で起きた事故で散らばってしまった。世界の管理者の補佐をしている私が命じられて集めているが、時代も世界も関係なく探さなければいけない上に総数も不明で場所もざっくりとしか分からないので普通の人間なら死んでいるくらいは経過しているはずだ。人間の寿命が関係ない私だから問題ないが、他の人に任せるともできないので不便とも言えるな。

「今度の鍵は大人しいと良いわね……」

私の隣でため息をついている。リサ、ため息をつくると幸せが逃げると言うぞ？
「そう願うよ。毎回メンテナンスで動けなくなるのも困るからな」

私のメンテナンスをできる人間は多くないので、なるべく故障せずに過ごしたいものだ。

しばらく歩いて一つの家の前で立ち止まる。リサがドアノッカーを鳴らした。

「リン、入るわよー」

「お姉ちゃん!? ちょっと待って!」

中から何やら大きな物音が聞こえてきたが、気にせずリサが扉を開ける。

「あんたね、またなの……?」

「ヒィッ!？」

うむ。モンスターよりもすごい顔だぞ。



「お姉ちゃん、ひどい……」

「片付けをしていない、貴女の自業自得でしょう」

私達の目の前でメソメソと泣いているリサとほぼ同じ見た目をしている白衣の少女はリサの妹のリンだ。髪は伸ばしっぱなしなのか腰まで到達しようとしていてボサボサである。ちらりと横を見るとゴミ箱にまとめられている私の同類が沢山いる。姉であるリサが片っ端からぶん投げていったものだ。もう少し優しくして欲しいのだが……。

「みんな生きているのに……」

「生きていると言うなら、ちゃんと動かしてから言いなさい」

訂正しよう。私の同類ではなくガラクタだったようだ。

「あ。ベルナさん」

「久しぶりだな。息災だったか。そして、その様子だと研究は進んでいないのか」

私がそう言うとしリンは表情を暗くする。人間で言うへこんでいるというもののようなようだ。

「うん。私達は元氣だよ。半年ぶりだね。研究はね、情報が不足していて中々……」

「ふむ。だが、随分前の設計で製作された機械である私をメンテナンスできるのは、どの世界でも、どの時代でもいなかった。お前だけだからな。誇るがいい」

「ありがと、ベルナさん……」

少し、元気が出たのか、笑顔が出てきたな。それなら良かった。世界の鍵集めのときに世界の鍵から受けた損傷で動けなくなってしまうた私を見つけたのが彼女だ。この姉妹とは、それ以降の付き合いとなる。

「ベルナさん、今日はメンテナンスのために？」

「いや。今日は別件だ。どうやら、この街に世界の鍵があるようなのだ」

「え」

ふむ。似ている顔だと姉とそっくりな反応をするな。

「私じゃ分からないもの。あんたも探すの手伝いなさい」

「それは構わないけど、大丈夫なの……？」

「被害は今のところ出ていないわ。無事だと祈るしかないわね」

「早く見つけようね、お姉ちゃん」

「もちろんよ。貴女が頼りよ」

「分かっているよ」

死地に向かう覚悟を決めている様子の姉妹。しかし、この対応で間違っていない。下手したら死人が出るほどに奴らは危ないのだ。そして、世界の鍵は私と同様、見た目では気づきにくい。私を持つ探知である程度の場所は特定できるものの、一目で私のことを機械だと見抜く鑑定力を持つ彼女の協力は必要不可欠なのだ。

「早く確保しなければ。早速行きましょう」
奴らの危なさを知っているから、私達は一刻も早く確保するために出かけることにした。